
プラネタリウムの天気予報

月星花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プラネタリウムの天気予報

【Nコード】

N0197Y

【作者名】

月星花

【あらすじ】

仙台市国分町から少し外れた場所にあるバー「Square Rose」。この店の常連同士が織りなす恋愛模様。彼女は嫌われているから無愛想だし、彼も彼女には恋人が居ると知っているから無愛想である。そんな二人が札幌の地で会い、バーの手伝いをしたりと、少しずつ距離が縮まっていくのだが、贈収賄事件が起こつたり、許嫁が現れたり二人の距離は離れるばかり。彼女の居場所も国内から国外へ！彼は何処まで追いかけられるのか！？
*****お決まりストーリーです。それでも宜しければお楽しみ下

やいませ。

0話 始まりは。

「待て！ 周、早ま・・・っう・・・」

「俺は、犬じゃない」

「・・・私は、猫派、だ・・・」

「俺は、犬も猫も嫌いだ」

「・・・女が、一番か・・・」

「俺にも、選ぶ権利は有るが」

「・・・なら、他の女を探せ・・・」

「秋弦」

「！ おい！？ 何でその・・・んっ・・・」

「逃がさない」

[illegible]

あとがき。

字数不足で投稿出来なかった為、敢えてここに0話のあとがきを載せさせて頂きます。

この0話、これだけだとさっぱり意味が分かりません。よく分かっているのですが、敢えて0話として載せさせて頂きました。

このお話の始まりは此処からなのだと言う作者の心情です。

多分十話前後辺りにこの0話に戻りますので、それまでは少し長めのイントロダクションだと思って読んで下されば幸いです。

それでは、次話より始まります。

1話 天国への階段

『Square Rose』

毎週末、仕事帰りに立ち寄るバーがある。

繁華街の中心に有るのだが、ビルとビルの間をすり抜けた先の公園のもう一つ先の小さなビルの二階にある。

要は、物凄く分かりづらい場所だと言える。

しかし、目の前に公園が有る為、車を止めるスペースが存在する事は大変ありがたい。

今日は車では無いが、時々社用車で来る事があるからである。

一週間の疲労に加え、普段の運動不足から来る鈍った体に、二階まで続く階段が天国まで続くかと思う事もしばしばだ。

（二十代の女性の心はおじさん化しそうだ）

その先には天国の入口とは似つかわない、真つ黒な扉が佇んでいる。扉の片隅には一本の赤い薔薇の花が水割り用のグラスの中で凜と咲き誇っている。

（やっぱりここは天国だな）

自分はこの一本の花が見たくて通っているのだと思う。

ギシツと音を立てて扉を開くと大音量のジャズが覆い被さって来た。

「おう、お帰り」

「ん、ただいま」

「ルウくん！お帰りー」

カウンターの一番奥の席に腰を下ろす。

と、目の前には何処かの定食屋か？と思うお膳が現れた。

「ロクな物食べてないでしょ？まずは食べなさい」

これは多分ママお手製の夕食だと思う。

白身の焼き魚、煮物、ひじき、漬物、それと茶碗に半分程の白米。

「頂きます」

お手拭で手を拭い、顔の前で手を合わせる。

「ママ？僕には？」

「白さん！？さつき焼き肉食べて来たんでしょー？」

「うん。今日は息子のサッカー部のお父さん達と焼き肉食べて来たよー。でもルウくんのも美味そうだなー」

白さん（しらさん）はこの常連さんで、個人病院の先生だ。

丸い顔に丸い体で、何時でもこにこしていて、七福神の恵比寿様に良く似ている。

その恵比寿様は何時でも青いパーカーにベージュのコツパン姿と決まっている。

のほほんとした見た目で患者さんの受けも良く、病氣の見立てもしっかりしていると評判なのだとか。

確か四十歳になったらしく、晩婚だったが小さくて愛らしい奥さんと、息子と娘が居ると聞いている。

まだママにご飯の催促をしている白さんに軽く会釈をして、ご飯を頂く。

「マスター、水割り下さい」

「食ってからでいいだろう」

「喉つまりしそう・・・」

「味噌汁は作らなかつたからな・・・待ってる」

そう言っ作ってくれたのは、少し薄目のウーロン茶割りだった。

ここ『Square Rose』（スクエアローズ）は天道夫妻が経営するバーである。

夫婦共に四十代半ば、マスターは中肉中背で銀行員の様に黒い髪に黒縁の眼鏡を掛けている。何時もインディゴのデニムとTシャツに

黒の胸当ての付いた短いエプロンを付けている。

ママはマスターより少しだけ背が低いがナイスバデーの持ち主で、ショートカットの短い髪を真っ赤に染めている。それがまた淒く似合っていて、他の誰にも似ていない個性が際立たせている。何時見ても同じ服を着ていないのも百貨店勤務の賜物だろうか。

結婚して十数年経つが子供に恵まれず、二人が勤めていた百貨店も店じまいが決まり、本社勤務（東京）を打診されたが行く気になれず、それじゃあ店でも始めるかと思いつたのがバーだったらしい。不定休で不定期で喧嘩をする夫婦の店だが、なかなか居心地が良い。開店当初から通った店だから居心地が良くなったただけなのかもしれないが。

「倉沢はどうだ？あいつが主任とか信じられん」

「主任って立場にはまだ慣れてないかな。自分が率先して営業に回ってる」

「部下が大変だろうな」

「人が良過ぎるんだよ」

倉沢さんとは私の同僚で、その前は天道夫妻の同僚であつた。

百貨店の閉鎖で退職し、私が勤めている会社に中途採用された。

三十代後半で奥さんと一人息子が居る。

見た目は体育会系だが、笑うと目が無くなる程つぶらな瞳の持ち主である。

人懐っこい笑顔と重い荷物も楽に運べる体で百貨店ではおばさん受けしていたらしいが、商社ではそう上手くは行かない。

それでも耐え忍んでようやく昇進した。

その倉沢さんの歓迎会の二次会が、このお店だつた。

会社側では二次会まで組んでおらず、中途採用の三人がそれぞれに自分のお気に入りのお店に連れて行くと言う話になり、私は只何となく倉沢さんのグループに混ざっていた。

オープンしたばかりのお店だと聞いて少しがっかりし、別のグループに合流しようかと思ったが、それもまあ今更かと思いいそのまま付いて行った。

落ち着かない店なら後は帰ればいいと思っていたのだが、今では常連と言えるレベルまで通っている。

とても良い店を教えて貰ったと、倉沢さんには心の中で感謝しているのだ。

個人的になんだが、常連さんの居る古いお店が好きだったりする。

若いマスターのお店や若い女性の居るお店はとても苦手なのだ。

それまで時折通っていたお店は、五十代のマスターが一人でのんびり営んでいるカウンターバーだった。

しかし、真つ黒い扉の脇にある一輪の赤い薔薇を見た時には、もうお気に入りの店になっていた様な気がする。今更だけど。

その日以来、毎週金曜日の夜はここに来ている。

ギシツ と音を立てて開いた扉から見慣れた顔が覗く。

「おう、お帰り」

「これでいいのか」

スーパールのビニール袋を差出し、何やら話している。

「ああ、悪かったな」

「いや、通り道だから」

私の席から椅子二つを空けた席に腰を下ろす。

こちらをチラリと確認して軽く会釈をしたまま、私の手元の御膳を見て少しだけ開かれた眼には軽蔑の眼差しが混ざっていた。・・・様に感じる。

彼は「シュウ」。

皆からそう呼ばれている。

私がここに来るようになった数か月後辺りから、よく見かける様になった人だ。

彼もこの常連で、忙しい時はカウンターに入る事も多々ある。身長が186cmで、体重が88kg、有名な四大を卒業しているとか・・・この店での噂話で聞き知った事だった。

何時見てもスツキリとした服装をしている人だと思う。

黒、グレー、ベージュなどの細身のパンツにジャケットを着ている。その中はTシャツだったりワイシャツだったり色も柄も様々なのだが、何時でも彼らしい組み合わせになっているのが不思議だった。それがセンスと言う物なのだろうと感心する。

それと、一番感心するのは何時でも靴が綺麗な事だった。

私は相手の顔よりも靴の方に関心があるので、ついつい深い挨拶をしながら相手の靴を眺めてしまうのだ。

私の経験から言って、日本人は十人中二人位しか靴の手入れをしていないのが実情である。

さて、これでシュウの顔が良かったら必ずモテるだろう。

私には憎らしい顔にしか見えないが、悔しい事にカッコ良いらしい栗色の髪の毛は耳が隠れる位の長さで少しだけウェーブが付いており、少し太めの眉毛はきりつとし、その下にある瞳は大きく切れ長で、鼻筋は通っており、薄くも厚くも無い唇は大きく、笑うと白い歯が綺麗に並んでいる。

当然、モテるんだろう。でも女性を連れて来た事は無い。

連れて来た事は無いが、たまに見かける可愛い女の子の常連さんと仲が良い。

二人で厨房の手伝いをする事も数度見かけている。

多分、そう言う仲なのだろうと思う。

多分、と言うのは殆ど話した事が無く、お客さん同士の話を聞いているだけだから。

仕事で疲れているから、極力他の人と話そうとは思わない。

人間観察しながら、只、ぼーっとしていたい。

自宅でのんびり過ごすのも良いんだが、部屋に入ると別のスイッチが入ってしまい、あれもこれもとする事ばかりに目が行ってしまう。唯一ぼーっとしてられるのは、週末のこの店に来た時だけとなってしまう。

それでも時々五月蠅い奴に見つかる事がある。

「！・・・！ルウっ！」

耳元で呼ばれて、後ろを振り返ると、そこには正しく五月蠅い奴が立って居た。

「三輪さん、こんばんは」

「相変わらず青い顔してるねー」

「あー化粧直してないからですねー」

「またそうやって誤魔化すか？飯食って無いんだろ」

スルリと隣の椅子に座りこむ。

三輪さんは、このビル1階の旅行会社の社長である。

四十代前半と思われるが未だ独身で、女性関係も賑やかである。

見た目が良い上（俳優の佐藤浩一をあっさりさせた感じかな）、社長だからである。

本人曰く、アルマーニと言うブランドの洋服をこよなく愛し、その洋服の為に働いているのだそうだ。靴もそのブランドらしく、彼も靴を綺麗にしている一人である。

「ルウ、なあ、イタリア旅行に行かないか？」

「イタリアですかぁーお休みが取れば行きたい国ですねー」

「じゃあ一緒に行こう！婚前旅行だ！」

「結婚の予定は有りませんよ」

「何？じゃあ夏目とは別れたのか？」

「ここで夏目さんを出しますか？あははは」

夏目とは私の上司で恋人である。（あつたかな）

この春の異動で九州へ転勤となった。

最初の頃はよく電話が来たが、今では電話もメールも来なくなった。新しい恋人が出来たのだらうと推察している。

「それじゃあ、私はこれで」

カウンター越しに会計を済ませる。

夕ご飯の分も取って欲しいのだが、サービスと言って断られた。

近い内に、何か持って来よう。

本当はお金を取ってくれた方が気分が楽なのだが、そうとも言えず笑って誤魔化しておく。

階段を下り外へ出た所で、上に昇る人とすれ違う。

シウウの多分彼女、名前はいちご。

お互い顔見知りなので会釈をして通り過ぎる。

ふわっと香る苺の様な甘酸っぱい香り、ショートパンツにレギンスという女の子らしい服装がとても似合っている。

時計を見ると日付が変わっていた。

もうそんな時間だったのかと思い、途中の自販機で缶コーヒーを買って飲みながら、ゆっくり自宅へと帰って行った。

1話 天国への階段（後書き）

作者初の恋愛小説を書き始めました。拙い文章かと思いますがご了承下さい。それと、これまでの作品のように連日投稿は出来ません。ゆっくりのんびりとなりますが、これまで以上に気長にお付き合い頂ければ幸いです。

2話 きっかけ

・・・チリリリン・・・チリリリン・・・チリリリン・・・
んー・・・電話・・・携帯・・・あー鞆の中だ・・・
・・・面倒くさい、もう少し寝よう・・・

土曜日、結局起きたのは夕方だった。

週末は寝だめをする為に有るような物だ。
出掛ける事もしない、ひたすら眠る。

今日は何時よりも早く起きたから、まずは洗濯をしようか。
目が悪い私は手探りで枕元のメガネを探し、メガネを掛けると今度は髪の毛を纏めるゴムを探す。

髪の毛をゴムで結びながら冷蔵庫から缶ビールを取り出し、飲みながら洗濯機を動かす。

【長坂秋弦様】と書かれた一週間分の封書に葉書、ダイレクトメールを開封して片づける。

その内の一枚の絵葉書を、微笑みながら冷蔵庫に張り付ける。海外旅行中の両親からのエアメールだった。

色柄物別に分けた三回分の洗濯物をロフトに持ち上げ、一気に干す。
腹が減ったなーと思いながらテレビを見ていたが、何時の間にか寝てしまった。

翌、日曜日。

昼前に起き出し、化粧もせず近所のコーヒーショップへ足を運び空腹を満たす。

ついでにアメリカンコーヒーを大きなマグカップでもらい、窓際の席でゆつくりと本を読む。正味二時間。夕方までに掃除を済ませ、ラジオを聞きながら本の続きを読みビールを飲む。

一週間ぶりに風呂に入り体を伸ばす。（普段はシャワーなので）日付が変わる前に布団に潜り込んで就寝。

あー、昨日の携帯電話は誰だったかな。

翌朝、会社へ行く前に携帯電話の履歴を確認する。

【不在着信：080*****1225】

アドレスに未登録の番号だった。

間違い電話か。

携帯電話をポケットに入れ、会社の入口で社員証を機械にかざし「ピッ」と音を立てて通り過ぎた。

私の勤める会社は商社と言うより、大手自動車販売会社と言った方が分かり易いと思う。

名称はH I H 技研工業、本社は東京。支店は国内、国外共に多数存在する。

私は東北支部の企画課に在籍している。

企画課とは良い名称に聞こえるが、その中で雑用を一手に引き受けている。

企画と名の付く功績に一度も名を遺した事も、関わった事も無い。それでも忙しさは半端では無い。

企画の中心を担う人達はデスクに座っていられる時間が少ない。戦略会議だの来客だのと殆どが外での仕事だ。

彼等からの簡単なメモや、資料、電話での概要を踏まえて彼等の思考をレポートに起こす。

其処から先はメールでの遣り取りで、変更部分や追加、削除と、最初とは随分違った結果の「企画書」が出来上がる。

出社はゆっくりで助かるが、退社時間が10時を下回る事は少ない。これで新型車の発表となると、退社時間は日付が変更となる場合が多い。

下手をすると翌日までぶっ通しも少なからず有るのだ。

本日も月曜だと云うのに、出社早々から会議が入り昼食時間もかなり遅れた。

最近の不安定な「円」を取り巻く状況に本社も戦々恐々なのだろう。こればかりは個人ではどうにも出来ない。

「長坂、相変わらず食うねえー」

「社食が美味しいですからね」

「その割に太らないな」

「結構来てますよ」

そう言いながらお腹辺りを撫でてみる。

がらんとした社員食堂で企画課の4人が遅い昼食を取っている。

他にも会議のメンツは居たが、既に外出している。

今が私の至福の時間である。

社食だから安くて美味しい。

日替わり定食が有るから、毎日同じ物を食べなくてもいいし、楽しみでもある。

今日の日替わりは生姜焼き定食。迷う事無く大盛りを注文する。出来れば土日もやっていて欲しいと思うのだが、彼らも休まないといけないのだ。

後一口で食べ終わるという時に、携帯メールが着信のお知らせを告げる。

「課長のお呼び出しだ」

「・・・俺もだ」

隣に座る那智さんにも呼び出しメールが届いたらしい。

それじゃー行くかと、残りの一口を口に入れ、ぬるくなったお茶を飲み干し皆で席を立った。

後少して週末を迎える頃、札幌モーターショーのお手伝いが舞い込んだ。

東北での開催が無いので何時も羨ましがっていたのだが、今回は通訳として私の他に2名が招集されている。

他の二人は秘書課の美人な方々なので、奇麗所はお任せし、私は何時もの如く後方部隊として仕事に勤しむ。

休憩時間を利用して他社の新型車を見学する。

これと言って目新しい物は無いが、ライバル社のTTK技研工業から出された新型車には一目置いた。

低燃費で有りながら、デザインの斬新さに若者の心を掴んでいる。

うちの会社はファミリー向けが多いからな。

自社のブースに戻ろうとした時に、目の前を横切る数名のスーツ軍団に接触してしまう。

「失礼致しました」

直ぐに頭を下げて謝る。こちらは出展サイドだ、お客には謝るのが筋だろう。

「嫌、こちらが悪かった」

顔を上げた団体の中には見知った顔があった。

「長坂さん！九条さんと知り合いですか？」

「九条さん？」

「今そこでお辞儀しながら話してましたよね？」

「嫌、ぶつかつたから謝っただけですが」

「なーんだ、そうなんですか」

「九条さんって誰です？」

九条周（くじょうあまね）28歳。

TTK 技研工業の取締役代表の三男。

京都大学を中退しハーバード大学へ進学。（勿論卒業している）

2年前に日本に戻り仙台支社の支社長代理のポストに就く。

長男は本社で重役に就いており、二男は芸術家として海外で生活しているとか。

「私、第一志望はTTKだったんですよ。でも落ちちゃって、叔父さんのコネでH.I.H.に入れたんです」

別に悪いとも思っ居ないのだろう、東京本社の秘書課の美人さんは溜息を付きつつ話してくれた。

「TTKが第一志望で内情に詳しいって事は、玉の輿狙い？」

「勿論ですよ！高校の頃から追っかけてましたから」

「高校？」

「同じ星城高校です。二つ上の先輩で、その頃から人気がありましたから」

星城高校は東京のお金持ちオンリーの有名校、彼女もそこ出身って事はお金持ちと言う事か。

それよりも彼女が二十六歳って事の方が吃驚だったりする。私よりも年下だと思っていたが、私の方が一つ年下だった。

最終日の日曜日も無事に終わり、手伝いの社員達も飛行機の時刻に間に合う様に帰って行った。

私は明日と明後日が代休になる為、こっちに一泊する事にした。なにせ地元なもので。

高校までは札幌に住んでおり、進学先が仙台の大学だった。

就職活動で地元も視野に入れていたが、結局今の会社の内定を貰ったのでそのまま仙台に住みついていてる。

一泊するとは言え、それでももう少し早くに出れば良かったと思う。会場が出る頃は日が差していたのに、JRの乗り場に向かう途中で突然雨が降り出した。

無人のタクシー乗り場で雨宿りをする。

イベントもとうに終わった時間の為、タクシーも止まっていない。小振りになつたら走ろうか。

等と考えて、雨とにらめっこをしていたら、目の前に黒い乗用車が滑り込んで来た。

（助かった）

タクシーが来たのかと思い喜んだのも束の間だった。

後部の窓が下がり、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「駅まで乗って行くといい」

助手席から若い男性が降り、後部のドアを開ける。

「いえ、結構です」

「人の好意を無にするのか」

助手席から降りた男性が私の荷物を取り上げトランクに積み込む。

「・・・ありがとうございます」

大人しく薦められた後部座席へと身を沈めた。

（親切の押し売りと好意は同等だと思わないんだけどな）

彼のプライドを傷つけない訳でも無いし、本人も好意での行いだと言っているのだから、その言葉に甘えておく事にした。

毎週末に会うバーの常連に、まさか札幌で会うとは思わなかった週末だった。

2話 きっかけ（後書き）

大学は実名ですが高校は架空です。大学は実名の方が印象とか雰囲気とか感じ取れそうな気がして、そのまま使わせて頂きました。*

* * 大変申し訳御座いませんが、若干名の名前の変更がありました。読んでいた方がおられましたら、お許し願えればと思っております。本当にごめんなさい。 > (— —) <

3話 どれが偶然？

「駅でいいのか」

「はい」

「これから帰る訳では無いだろう」

「明日、帰ります」

「そうか、夕食を一緒に取ろう」

「は？」

「風邪を引くぞ」

周は自分の上着を脱ぎ、私に掛けてくれた。

私の上着はキャリーバッグの中に入っている。

濡れたワイシャツが気になってはいたのだが、トランクに入れられた為に取り出せない。

周は何を考えているんだ。（でも、暖かくて気分が解れる）

九条周、彼は良く行くバーで度々会う常連のシュウである。

周という漢字は普通読みなら「シュウ」だろう。

しかし、秘書課の同じ高校だった彼女から聞いた読みは「あまね」である。

「あまね」と呼ばれたく無い気持ちも分からない訳でも無いが。

嫌々、それよりも自分が勤める会社のライバル会社の御曹司だったとは驚いた。

見る度にセンスの良い高級そうな洋服を着ていたので、金持ちだろうとは思っていたが、私の想像する金持ちとは桁違いだ。

九条家とは元々は貴族（華族）で、古くは源氏の血を受け継ぐ血族だと言われている。

戦争での敗戦に伴い貴族（華族）制度は廃止され、貴族は消滅しているが九条家や西園寺家など、未だにその名を知らしめている貴族は多い。

その中でも九条家は時代の波に乗り、車産業や重油の貿易、銀行・学校・医療・ホテル経営等とあらゆる方面で活躍している。

TTK技研工業も初代創業者は九条家の人であり、周の祖父にあたる人だ。

現会長も創業者の息子で周の父親で、次期会長もその息子の長男だろうと噂されている。

世襲制は何時でも問題とされるが、この家の血筋は優秀な人間を生み出している為か、余り問題視される事が少ない。

そんな高貴な方と何の因果が向かい合わせて食事を取っているが、たまたま顔見知りだったからの気まぐれだろう。

（自分のジャケットはレストランに入る前に取り出せたので、礼儀には差し支えないだろう）

高級ホテルの高級フレンチは美味しいのか美味しくないのかさえ分からなかった。

「九条様、今夜は大変御馳走になりました」

深々とお辞儀をしてエントランスで別れる事にした。

「泊まる所は決まっているのか」

「いえ、駅前のビジネスホテルに泊まるつもりです」

「ここに泊まればいい。荷物も部屋に上げてある」

「！？そ、それは、遠慮致します」

あーもー面倒だし。荷物を取りに行かなきゃ。こんな高級ホテルに泊まれる身分じゃ無いんだよ。

等と内心焦っていた為、私を呼ぶ声が聞こえなかった。

「おい！ルーだろ！？」

肩を思い切り掴まれ、後ろへよろけたのを支えているのは懐かしい顔だった。

それは高校の同級生の池端君。

「あ？えっ？　おー　イケー！」

「久しぶりじゃん！帰ってるんなら連絡よこせよな！」

「仕事で来てたから時間取れなくてさー」

「何時帰んのさ」

「明日」

「じゃあ、今から飲みに行こうぜ！タカシやマヤも先に飲んでるしさ」

「おー懐かしいメンツじゃん！」

「彼氏も一緒に行こうよ！」

「邪魔じゃ無いか？」

「気にしない、気にしないって！」

「待て、イケー！彼氏じゃないってば、会社の知り合いだって！」

「いーからいーから、ほら、行くべー」

男二人は何やら楽しそうに会話をしながら先を歩いて行く。

待て、何故九条さんが一緒に行くんだ。

ああ、もう知らんぞ。

・・・チリリリン・・・チリリリン・・・チリリリン・・・
んー・・・携帯・・・何処だー・・・
あー・・・面倒・・・

「・・・ああ、分かったよ。伝えておく。そうだね、また飲もうな。楽しかったよ」

ん？
誰？

ベッドが軋み、私の髪を撫でる人が居る。

「？」

あー瞼が重い・・・でも何かがおかしい。
眼球に力を込めて一気に瞼を持ち上げる。

「・・・うわっ！」

目の悪い私が驚く程、直ぐ目の前に周の顔があった。

「やっと目を覚ましたか」

「・・・何で？何であんたが居る」

「ここは俺の部屋だが」

「か・・・鍵を掛けた筈だ」

「ドアは一つじゃ無い」

周の顔が楽しそうに歪んでいる。

昨夜は記憶を失くす程飲んでいない。

つてか、記憶を失くした事が無い程強いんだが。

（只、一度寝ると起きれないのが問題だったりする）

荷物を取って別のホテルに行くと言ったが、もう遅いからここで寝ると押し問答をした。

最上階のペン트ハウスで寝室が3つも有るし、鍵も掛かる、一人で寝ても二人で寝ても金額は同じだから、タダで寝て行けとの言葉に思わず乗ってしまった。

少しは酔っていたし、眠かったのだ。

あーこいつの言葉を信じた自分が呪わしい。

周を部屋から追い出し、全てのドアの鍵をかけ（二か所もあった！）
急いでシャワーを浴び、身支度を整えてホテルを出る事にする。

「この度はありがとうございました」

「もう行くのか」

「はい。千歳までは時間が掛かりますので」

札幌市内には近距離間の空港しか無い為、千歳市の千歳空港まで約1時間掛けて行かなければならないのだ。

窓辺でコーヒーを飲みながらこつちを振り返る姿は、少しだけカッコ良かった。

長身にスリムな体は無駄な贅肉が無く、薄っすらと割れた筋肉が程よく盛り上がっている。

腰履きのグレーのスウェットは、長い脚を覆い隠すようにゆったりとしている。

早い話が上半身裸で、これ見よがしに色気を漂わせているだけなのだ。

これで性格が良ければモテるだろうに。
嫌、このままでも十分モテるんだっけ。

飛行機の中でコーヒーとサンドイッチを頬張り、やっと生きた心地がした。

週末の金曜の夜、いつものバーに足を運ぶ。

扉の片隅の薔薇の花を見て安心すると、重そうな扉を開いた。

「おう、お帰り」

「ん、ただいま」

「ルウくん！ありがとうね！カニ！」

「あーいえ、お世話になってるから」

先週の札幌出張の時に、カニを送っておいたのが届いたのだろう。

カウンター奥の席に座ろうと目をやると、先客が居た。

（周に取られたか）

椅子を二つ空けて座る。

お互い軽く会釈を交わし、一言も会話も無く、ぼーっとしながらウイスキーを飲んだ。

翌週も、その翌週もカウンター奥の席には座れなかった。

十一月も中盤になる頃、早目の忘年会の人出でこの店も混むようになっていた。

そんなある週末、何時もより少し遅く入ったバーの中は満席だった。

「おう、ルウ、カウンター入れ」

「えっ？」

「ルウくん！こっち来てー」

ママの声に、しょうがなくカウンターの中へと入って行く。

「ごめんね？おつまみが溜まつちゃってねー、急いで作るから、その間カウンター頼めないかしら？」

「ああ、そういう事なら良いですよ」

カウンターの席には半分以上が見知った常連さんで埋まっていた。

奥の席から、三輪さんの知り合い、三輪さん、倉沢さん、白さん、

白さんの連れ、私の知らない人三人。

「ルウくん、僕にハイボールお願い」

ジャケットを脱ぎワイシャツの腕まくりをしてカウンターに立った瞬間、オーダーを入れたのは三輪さんだ。

「オレ、ハーパーロック」

これは倉沢さん。

ボトルで飲んでいる人のグラスを見ると、まだ半分以上入っているから、この二人の分を作る事にする。

後は、グラスの減り具合を見ながら適当に足しておけば良いだろう。白さんは連れの人と何やら話し込んでいるから相手は要らないだろう。

奥の席に座っていた三輪さんの知り合いが、三輪さんを残して帰って行った。

その人と入れ替わる様に周が入って来た。

私の特等席に腰を下ろす。(もう少し遅くに来るんだっただな)

マスターが周のキープしてあるジャックダニエルをカウンターに置く。

私は氷と水とグラス二つを用意して、JDに手を掛けた所で声を掛けられた。

「山崎、ダブルで」

周の前にはジャックダニエルが鎮座しているが、山崎とは。

「お前も飲んだらどうだ」

「ん、サンキュ。そっちでも良い？」

目の前のJDに目をやる。

「ああ」

奥から出てきたママと、グラスを取り出そうとした私とぶつかった。パチッ、と音がして髪の毛を止めていたヘアクリップが飛ぶ。

「「ごめん」」と言い合い、クスリと笑い合う。

ヘアクリップを探すが無処にも無い。

後で探すことにして今は注文を捌く事に専念する。

胸元まで伸びた髪の毛は癖毛で広がり易い。それを耳に掛け片方に流してワイシャツの胸元に突っ込んでおく。

それでも少しずつ髪の毛が顔に掛かってきて大層邪魔だった。

「はい、山崎さんのダブル。私はジャックのダブルを頂きます」

グラスを合わせて、相手が一口飲んでから自分も御馳走になる。

「経験者か？」

「何が？」

「手馴れてる」

「ああ、大学の時にバイトしてたから」

「ええ？ルウ、ホステスしてたの？」

この横槍は三輪さん。

「私にホステスなんぞ務まりませんよ。小さなカウンターバーで働かせて貰ってたんですよ」

「へー、長坂さんの意外な一面を見たな」

「倉沢さん、会社では内緒ですよ」

カウンターの飲み物を捌き終わった頃に、テーブル席からの注文が入った。

殆どがカクテルだったので、こちらはマスターにお願いする。

カクテルは作る人によって味が変わるのだ。

私は横で飾り用のライムやレモンを切っておく。

ピュツ と果汁がメガネに飛んだ。

メガネを外してその辺のふきんで拭き取る。

メガネを掛け直してカウンターに目をやると、そそくさと皆の視線が逸れた。

気のせいだったかな。

何故か周に睨まれた。

3話　どれが偶然？（後書き）

雨の中を走って行く男性、それもスーツ姿の男性だと男前度が30%は増すと思つてます。女性の場合、軒先で雨宿りしているんだけど、雨が掛かって濡れたブラウス、それも白いブラウスで少し体に張り付いて、中に着ている下着が見えたりしたらドキツとしませんかね？

私的には萌度50%です。これが男性だともつと確率が上がりそうな気がします、周はどう感じたんでしょうか。（笑）

3話では周の強引な所を盛り込んでみましたが、いかがでしたか？

さて、名前の記載で九条と言う苗字を使用させて頂きましたが、実際の九条家とは何ら関係は御座いません。

4話 負けず嫌い。

「長坂、那智と揉めたって？」

「藤堂さん、地獄耳ですね」

ここはお昼の社員食堂である。

今日の日替わり定食はさんまの焼き魚定食、勿論大盛りだ。

藤堂さんは同じ企画課の優秀なアイデアマン、必要以上他人の手は借りない主義の人。

それでも二・三カ月に一度程の割合で、ヘルプを頼まれる。

外で食事を済ませたのか、紙のコーヒークップを手に向かいの席に腰を下ろした。

「来春の新型車のコンベンションの資料が足りないって言われても、頼まれた物は用意しましたからね」

「メールは残ってるんだろ」

「はい。確認しましたよ」

「あれも口が悪いからな。しかし関係の無い事まで持ち出すのは気に障るよな」

「何時もの事です。それに皆が知ってる事ですから」

資料が足りないの何のと派手に怒り、メールのコピーを見せたら余計に怒られた。

この流れならメールで指示されなくても、関連する資料が必要だと分かる筈だの何だのと・・・

（あなた専用の秘書でも雇えと言いたくなる）

気が利かないから嫁にも行けないとか、やる気が無いから家事が出

来ないんだとか。

嫁に行かないのはしょうがないが、家事全般が出来ないみたいな言われ方には流石にむっとした。

掃除や洗濯は比較的好きな方。（部屋も綺麗よ）

しかし、壊滅的に上手く行かないのは料理だけだ。

ここで言い争ってもしょうがないし、このままでは時間の無駄になる。

早々に広報の担当者に内線を入れて、必要な部数のコピーを頼んで置く。

後、お茶も頼んで居ないらしい雰囲気を感じてそちらも一緒に頼む。那智さんの怒りを背中に感じながら、淡々と仕事を済ませて行く。それも、面白くないのだろう。

ここで謝れば気が済むのだろうが、私が悪くは無いのには謝る事は出来ない。

那智さんもアイデアマンであるが、人任せな所が多過ぎる。

「お前の男前な所を見習って欲しいもんだね」

「それは無理ですよ。女らしくしろって言われましたもの」

「はあ？あの馬鹿が！」

「那智さんらしいでしょ？」

そう言って笑っておく。

週末の土曜日、バーのママから頼まれた物を買って向かう途中、繁華街から少し外れた閑静な場所で那智さんを見つけた。そこは高級な割烹料理のお店の前だった。

男性二人と女性二人。

後ろ姿に見覚えが有るなと思った時、一人の男性が振り向いたので那智さんと分かる。その那智さんが話しかけてる女性にも何となく何処かで・・・？と思ったが、後ろ姿だけではわからなかった。週末まで接待とは、彼も大変だなーと少しは同情したりしてみる。

公園前の駐車場に車を止める。

昨日から借りたままの会社の社用車で買い物とはまずいだろうか。有る物は使うに越した事は無いし、手に持つには多過ぎる荷物なのだから勘弁して貰おう。

後ろのハッチバックを開けると大量の荷物に顔が引き攣る。

二回にして運べば何とかなるなと思い、持てるだけのビニール袋を両腕に潜ぐしてみる。

「俺が持つ」

後ろから声がしたかと思うと、周が脇から覗きこみ荷物的大半を抱えて持つて行く。

珍しい事に今日はデニムを履いていて、足元もスリッポンと言う身軽な出で立ちだった。

啞然とした私の目の前に残ったのは二袋のビニール袋と自分の鞆だけだった。

土曜日の【Square Rose】は初めてに近い。

曜日で店内とかマスターとかが変わる訳では無いのだが、不思議と金曜の夜意外に来た事が無かった。

平日は翌日の仕事を考えると行く気にならないし、休みで家に居る土日にわざわざ化粧をして着替えてまで出かけたいとも思わない。そうになると、必然的に金曜の会社帰りに足が向く事になるのだ。まずいな、やっぱりオジサマ化が深刻かな。

昨夜、いつも通りに店に来て見ると、生憎と周の隣の席しか空いて

いなかった。

まあ、気にする事でも無いかと、軽く会釈をして席に腰を下ろした。別に何も話さず、相変わらずぼーっとしながら飲んでいた。

コトン、と目の前に（周と私の間かな）お客さんからの頂き物だと言って、キューブ型でココアパウダーたっぷりの生チョコレートが数個皿に乗って置かれた。

周と顔を見合わせてからカウンターのマスターに目をやる。

「明日、手伝ってくれないか」

十二月に入ると、週末の混雑は大変な物だ。

普段はカウンター席だけで和やかに飲んで居られるが、忘年会や結婚式の二次会となれば奥にある三つのテーブル席が身動きが取れない程の人で溢れ返る。

このバーは入口からの見た目はカウンターが有るこじんまりとした店内に見えるが、エル字型になっている為奥のテーブル席が見えないだけである。

どうやら明日は結婚式の二次会の予約が入っているようだ。

今までは親戚の子（大学生で暇なやつが居るらしい）に頼んでいたが、明日だけはどうにも都合がつかないらしい。

急な事だが素人だと面倒で困るし、その点この二人は慣れている。

「分かった」

二人で生チョコを食べながら、ウイスキーを飲んだ。

珍しく他愛も無い会話を楽しみながら。

そう言えば、いちごちゃん、最近見ないな。

奥の厨房ではママが既に汗を掻きながら大鍋をかき混ぜていた。

買って来た物を片づけ、手伝う事を仰ぐと、野菜の皮むきのみを命じられた。

その傍らで、周がママに言われた料理を作り始めている。

「ルウくん、本当に料理が出来ないの？」

「ごめん、本当」

「だって料理教室にも通ったんだよね？」

「三か所程通いましたね。でも何故か予定とは別物が出来るんですよ」

別物が出来るならまだ良い方だ。

得体の知れない物が出来る上がる事の方が多いように思う。

見た目よりも味だと言うが、その味も一口でお手上げ状態である。

小学校の調理実習では私と組むのをクラスのほぼ全員が嫌がった。

それ以前の記憶では、台所で忙しくしている母への手伝いはもっぱら「話し相手」だった。

覚えては居ないのだが、何かをやらかしたのだろうと思う。

父が覚えているのは、帰宅した時に台所で大掃除をしている母と、食卓テーブルに乗った出前の寿司、ソファでコロンと寝ている私だった。

どうしたのかと聞いた父に、母は笑って言ったそうだ。

「秋弦がねお手伝いしてくれたの。楽しかったのよ」

その母も私が中学生の時に病気で亡くなっている。

私が大学生の時に父は再婚した。

その相手の人は母に良く似て笑う人だ。

初めて私の料理（？）を見た時も、只々笑っていただけだった。

私にはそれが何より嬉しくて、その時新しい母を認めたのかもしれない。

「シュウ、こつち持ってくれ」

店の方からマスターが声を掛けて来た。そのマスターのＴシャツの柄が、釣りをしているサントさんで吃驚した。いったいどんなセンスなのか、それより何処で売っているのか不思議でならない。

「これ、頼む」

私の顔を見て、私に菜箸を渡して店内のマスターの元へ行ってしまった。

ママはまだまだ忙しそうに動いている。

周の立つて居た場所へ自分も立つ。

目の前にはたつぷりの油に黄金色のやや丸い物体が沢山音を立てて泳いでいる。

覚悟を決め、菜箸を使って丹念に裏返した。

「で、どーやればこうなるんだ？」

「さあ・・・」

「で、お前の服はどうして油で汚れているんだ？」

「さあ・・・」

ママとマスターは困った様に笑っている。

しかし、周は納得出来ないと渋い顔をしたまま睨んでいる。

目の前に有るのは二枚の皿。

初めに周が揚げた黄金色のナゲットに乗った皿。

もう一枚は私が揚げた炭色で細かく砕けたナゲットらしき物が乗った皿。

「五分も経って居ないよな？」

「はあ・・・」

多分、直ぐに戻って来てくれたと思う。

私にとっては果てしなく長く感じたけれど。

「着替えは有るのか」

「車だから、直ぐ着替えてくるよ」

「そろそろ予約の時間だ。これを着ている」

手渡されたのはビニール袋に入ったクリーム色のワイシャツだった。（聞いた事も無いブランドのタグ付きだった。値段は付いていなか

つたから分らない)

4話 負けず嫌い。(後書き)

お手伝い編の前編になります。一話で収まらない様なので、変な所で区切ってしまいました。次話は出来るだけ早めに投稿します。

5話 メンソールのタバコ

「ふう」

厨房の奥には非常階段の扉が有る。

揚げ物や煮物などで汗を掻く程熱い厨房の換気の為に少しだけ開けてある。

その隙間から抜け出し、非常階段で一服する。

普段は吸わない。

精神的にダメージを負った時に吸いたくなる位。

年に、数度だと思う。

だから携帯していないし、買い置きもしない。

さつき、お客からの要望でタバコを買いに外に出た。

そのついでに自分用にメンソールの軽いヤツを買って来た。

ライターはお客の忘れ物がゴロゴロ有る。

料理なんて何年ぶりだっただろう。

あれが料理とは言えないのは分かっているが、洗い物以外で台所に立ったのは久しい。

仕事で失敗しても、叱られても、文句を言われても、タバコを吸いたいと思った事は無い。

次回で頑張れば良い事だし、何処が悪くて、何が問題だったか、自分で理解出来れば同じ失敗をする事が無い。

しかし、料理が絡むとどうにも精神的に追い詰められる気分になる。何処が悪いのか、何が問題なのか、さっぱり分からないのだ。

二本目のタバコに火を点けた時、非常階段にママの顔が覗く。今日のママは70年代のサイケ風ワンピースを着ており、付けまつげが

バシバシと音を立てながら瞬きをしていた。

「一本くれる？」

タバコを差出し火を点ける。

「普段も吸うの？」

「いえ、吸いませんよ」

「そうか、無理しなくていいからさ」

「・・・はい」

予約のお客は予定よりも多い人数で、予備に置いて在る丸椅子を出しても足りなかった。

それでも前の宴会で酒が入っていた為、皆陽気で気にした風も無かった。

団体さんは始めが大変だが、酒・氷・水・料理を一気に出してしまふと後は楽である。

その後は偶に入るカクテルの注文を作るだけだった。

その筈だったのだが、何故かその団体に私が引き込まれている。

「ほら、こないださ、髪を下ろして、メガネを取った姿を見た時に、オレ惚れちゃった訳でさー」

おい、何だ、止めてくれ！

今日はヘアクリップを使わずに黒いゴムで結わえて有る。

そのゴムを取られ、メガネまで外されては何も見えないのだ。

「お客さん、辞めて下さい。あの、メガネを返して下さい」

大きな声で怒る訳にも行かず、愛想笑いを浮かべながらも必至でメガネを探す。

「ねえねえ彼女、名前は？ここで働いてんの？」

「マジ！美人だし！」

「電話番号教えてよー」

周りで騒ぐ声が騒音にしか聞こえず、兎に角必死でメガネを探す。

キヤー！

向かい側では女性軍団が何やら騒いでいる。

「おい、僕の彼女に変な事したら只じゃおかないぞー」

と一本調子のマスターの声がしたと思ったら、大きな手で腰を抱えられてカウンターの方に連れ出してくれた。

「ほらメガネ」

私の手を取り、その上にプラスチックの物体が載せられた。

「あ、ありがとう」

メガネを掛けて見上げると、周が少し怒った顔で立って居た。

後ろではマスターが団体さんとまだ話している。

「えーマスターの彼女　？　嘘だーママさんも居るじゃーん」

「マスター！あのカツコイ彼はだれよー、教えてー」

「大きな声出さないでくれ。かみさんには内緒なんだぞー」

「彼に会いたかったらまた来てねー」

なんと言うか、流石だ。

「ルウくん、大丈夫？」

ママが心配して厨房から出て来た。

「すみません、捕まってしまって抜け出せなかったんです。以後気を付けます」

「ルウくん狙いだとは思わなかったわ。こっちも気を付けなきゃね」

「向こうの出し物は俺が運ぶ。お前はカウンターに居ろ」

「ああ、ありがとう」

カウンターの常連さんは白さんだけ。

今日も濃い青色のパーカーにベージュのコツパンだ。

他は知らない人で埋まっていたが、殆どがカップルだったので気にならなかった。

「ルウくん、今日は何て言うか、色っぽいなあ」

「ええ？そうですかね？いつも通りなんですけど」

気にしない振りをして、白さんの少なくなった焼酎の水割りを作る。周から借りたワイシャツは、何と！シルク100%の高級なシャツだった。

アイツのサイズの為かなり大きく、一番上のボタンを留めても鎖骨が見えるのだ。

ましてや屈み込むと胸元までバッチリ見えてしまう。

裾はズボンの中に入れたから良いが、袖が捲つても直ぐに下りてくるのが難点だった。

今は輪ゴムをアームバンド替りにして止めている。

しかし、このサラサラ感は気持ちが良い。

何時かは自分もこんな洋服を買いたいと思ったのは事実だ。

「さつき、絡まれたのかい？」

「いえいえ、団体さんのお遊びですよ。五月蠅かったですか？すみません」

「そうなの。なら良いんだけど、シユウくんが何だか慌ててたから」

「ああ、グラスを落したりしてたから、ダスター持って来てくれたんですよ」

「そうなの。この季節は何処の店も賑やかなんだろうね」

「そうでしょうね」

にこやかに話しながらも心の中では（？）だった。

日付変更線を越えた頃に、やっと団体さんがご帰還してくれた。

マスターの話では、先程のメガネを取った男性は前にも何度か来ていたお客で、たまたま私がカウンターに入った時にも来ていたそうだ。

何処かで見たような気がしていたが、幾ら考えても思い出せなかった。

しかしマスターから教えて貰って、ようやく思い出せた。
あの時、端に座っていた3人組だ。そう言えばあの時も名前だの電話番号だのと言っていたっけ。

残って居るのはカウンターの一组のカップルと、先程入って来た緑色のワンピースの女性だけだった。

四人で奥のテーブル席から皿やグラスを片づけ、厨房に運ぶ。

厨房のキッチンの方が洗い場が大きいから、マスター以外の三人で片づけを始める。

しかし直ぐに厨房のドアが開き、マスターが周に声を掛ける。

周は眉間に皺を立てて数秒返事をしなかったが、悪い、とだけ言って厨房を出て行った。

厨房での片づけはそれでも意外と時間が掛り、後は洗い終わったグラスを店に並べるだけになった時、マスターが厨房の戸を大きく開いた。

「皆帰ったぞー。ご苦労さん」

そう言いながらグラスを運ぶのを手伝い始めた。

「あら、シユウくんは？」

「先に帰った」

「じゃあ、お礼は今度ね」

カウンター奥の食器棚はグラスが殆ど出払っていた為、並べるのに時間も掛った。

綺麗に並べられたグラスを見ると何だか安心する。

「これは今日のお礼だ」

とマスターから熨斗袋を差し出されたが、慌てて断る。

「うちの会社、アルバイト禁止なんですよ。だからお手伝いって事にして下さい」

「嫌、しかしなー」

「誰も見てないし、私達も誰にも言わないわよ」

「本当に申し訳ないんですけど、会社に勤めている以上守れる事は守ろうと思ってるんです」

「そうか、分かった。別の形でお礼をするよ」

「いえいえ、楽しかったですから」

それじゃあ、と挨拶を交わして店を出る。

今日は酒を口にしていないので、車で帰る事が出来る。

ママが少し多めに作ったオードブルをタッパに詰めて持たせてくれた。

車に乗って、公園を回り込む様に進む。

車のヘッドライトが公園の中を照らして行く。

誰も居ないと思っていた公園の中のブランコがゆっくりと動いていた。

（風でも吹いたのかな）

その先を照らしたヘッドライトに、一つの影が浮かび上がった。

ヘッドライトはその影を通り過ぎて、人の行き交う通りへと向かって行った。

5話 メンソールのタバコ（後書き）

喫煙年齢前に喫煙し、喫煙年齢以降に止めた作者です。（笑）

今はタバコの煙に渋い顔をする位嫌いになりましたが、何故か年に1・2度タバコが恋しくなる事があります。そういう時は、やはり精神的に参った時でありまして、濃いコーヒーなんぞを飲んで紛らわしております。

やっぱり、タバコの鎮静作用は忘れがたい物なのかもしれませんね。

6話 それぞれの事情

「最近、いちごちゃん見ないですね」

「んー、そうね。でも、もう来ないと思うわよ」

それ以上話す気は無いらしく、ママは思わせぶりな笑顔を見せると、別のお客さんと話し始めた。

別れたんだろうか。

似合っていたと思っていた。

周の後を一生懸命に付いて行く姿は微笑ましかった。

周も苦笑いをしながらも、何だかんだと面倒を見ていたと思う。

あの時の、緑色のワンピースの女性よりも。

カラン。

グラスの氷が溶けてガラスにぶつかる音で我に返る。

私には関係無い事だな。

「ママ、これ渡してくれる？」

「何？ああ、シャツね」

「暫く、来られないから」

「実家に帰るんだっけ？」

「はい」

「クリスマスパーティーに来て欲しかったんだけど、しょうがないものね」

「楽しんで下さいね」

それでは良いお年を、と挨拶を交わして店を後にする。

途中、自販機で缶コーヒーを買って飲みながら歩く。

日付が替わった時間にも関わらず、表通りは賑やかだった。

（もう直ぐクリスマスだもんなあ）

あちらこちらのネオンも眩しく、目を細めながら表通りから一本向こうの通りへ出る。

その通りには昔懐かしい居酒屋や、薄汚れたスナックの看板が連なっている。

（私はこっちの方が好きだな）

少し先の居酒屋の前に、仲良さそうに笑いながら話している男女が居た。

「マジだつて！ここのおでんは超 旨い！」

「えー本当に！？」

「オレ、いちごに嘘は付かないつて。それに、この店は誰も連れて来た事無いんだ」

「マサヒロくん・・・」

「オレの秘密基地」

二人は肩を寄せ合いながら、その店に入って行った。

彼女は幸せを見つけたんだ。

其処にいる人々も笑顔になる、そんな仲睦まじい恋人同士だった。

周と居る時には見た事が無い自然な可愛い笑顔だった。

周の前では少し大人振っていたのだろう。

それに疲れたのか、そんな彼女を彼が支えていたのか、それはどちらでも良い。

彼女らしさを引き出した彼が側に居るのだから。

ママは知っていたんだろうな。

家までの帰り道、冷えた缶コーヒーの残りを飲もうと空を見上げると、其処には満点の星空が広がっていた。

クリスマスの三日前、今年最終の出勤日は慌ただしく始まった。

会社の半数が有給を使って休みに入り、残りの人員で片付いていない書類を始末する事になる。

それも昼過ぎには殆どが終わった。

大掛かりな掃除は業者に頼んでいるが、掃除をする上で邪魔な物や、必要の無い物等を処分する。

事務方の定時（五時）になる頃には殆どが終了した。

あちらこちらで、お疲れ様、良いお年を、との声が聞こえる中、この後仲間内で忘年会を企画している者達の賑やかな声が聞こえて来る。

ロッカーの中に置きっぱなしの物をエコバッグに詰め込み、見知った人達と笑いながら退社する。

「長坂さんは北海道だっけ」

「そうです。泉さんは地元ですよね」

「うん。今年は旦那様と温泉でお正月なんだ！」

今年の子供の日に挙式を挙げたばかりの新婚さんである。

私より三つ年上で、私と同じ位の身長で体重もそう変わらない筈だが、顔がぼつちやりとしている所為で良く太って見られると嘆いている。

栗色に染めた肩までのボブを内巻にして、くりっとした大きな目を輝かせながらピンク色に頬を染めて話す姿は大層可愛いのである。

「それじゃあ、来年！良いお年を！」

皆がそれぞれに手を振りながら、自分の家へと足早に帰って行った。

「長坂　っ！」

もう少しで駅のホームに辿りつく頃、後ろの方から呼ぶ声が聞こえた。

立ち止まり、振り返ると藤堂さんが手を振りながら走って来た。

「長坂、歩くの早い」

「普通です。どうしました？」

「明日の予定は有るか？」

「有りません」

「即答だな」

「嫌味ですかね」

「じゃあ、明日夕飯付き合ってくれ」

「はあ？」

「店は予約済だが、相手に断られた」

「・・・別の人選をお薦め致します」

「そうか。ラ・ラピスって店なんだが、キャンセルするか」

「えっ！？ラ・ラピスですか？キャンセルするんですか！そんな勿体無い！」

「・・・行くか？」

「うあー 良いですか？」

【ラ・ラピス】とは仙台近郊に有るレストランだ。

数年前まで雑誌やテレビでも取り上げられる事の多い有名店であった。

しかし、予約が殺到し常連のお客さんさえも行き辛くなってしまった状況に困った店主は、一切の取材を断る様になったと言われている。

それでも相変わらず予約は取り辛く、ましてやクリスマスシーズンとなれば不可能と言われている。

そんな逸話の有る店である。

頭で考えるより、気持ちの方が先走ってしまった。

「・・・・・・・・」

「長坂」

「・・・・・・・・」

「こぼしたぞ」

「！・・・ふあい」

「食事は会話を楽しみながら食うもんだろ」

「すいません。余りにも美味しくて、夢中で食べてしまいました」

「そんなに旨いか？」

「そりゃあ勿論！藤堂さんの口には合いませんか？」

彼の皿にはメインのお肉が半分程残っている。

「嫌、旨いよ。旨いんだけど・・・・・・・・」

「俺の料理が食えないのか？静」

真っ白い布を頭に巻き、コック姿の男性が藤堂さんの後ろに立って居る。

「誰もそんな事言っただろう」

「しかし、彼女の食べっぷりは気持ちがいいね」

肉の塊を口に放り込んだまま二人の会話に？クエッションマークを投げかけて見る。

「俺の兄貴なんだ」

「！」

「藤堂静の兄です。宜しくね」

「！」

確かに似ている。

藤堂さんは、なんと表現したら良いのだろうか、敢えて言えば普通の人。

目も鼻も口も大きく無い、でも小さくも無い。

細くも無いが、太くも無い。

背は180cmを切る位なので、特別大きくも無い。（でも小さく

も無いが)

但し、仕事をしている時のオーラがデキメンである。

兎に角、仕事をしている時の藤堂さんは物凄くデキメンになってしまう人なのだ。

仕事から離れるとやさしいお兄さんって雰囲気になる所が、余計に社内の独身女性のツボに嵌っているらしい。

そうなのだ、藤堂さんは三十歳を目前に控えた独身男性なのである。社内でも、那智さんと相反するタイプで人気がある。

那智さんは見た目通りの優男(やさおとこ)だと思って居るのは私だけだろうか。

レストラン【ラ・ラピス】のシェフであり店主のお兄さんは、藤堂さんよりはつきりした顔立ちで、少しだけ下がった目じりが優しそうな人だ。

「毎年この日は静の為に席を空けて待っているのに、今まで来た事が無かったんだよ。失礼な弟だよ、まったく」

「この日？特別な日でしたか？」(天皇誕生日ではある)

「お前、教えてないのか？誕生日」

「兄貴が余計な所で顔を突っ込むからだろう」

「そうか、悪かった」

デザートは特別バーションで持ってくるね、と言いながら厨房へ消えて行った。

6話 それぞれの事情（後書き）

いちごちゃんのお話はこの先に少しだけですが書くつもりです。どう言う立ち位置にいたのか位は説明したいと思ってます。秋弦とは直接的に関係のない女の子ですが、周にとっては少しだけ鍵になる女の子なのです。

7話 パースデーケーキ

「おめでとうございます」

「嫌、めでたい歳でも無いから」

何と言うか、居心地が悪くなってきた。

「断られた人って、彼女ですか？」

「あー、嫌、誰とも約束はしていない」

私の思い違いで無ければ、とても不味い状況に陥っていると思うのだ。

藤堂さんを「男」として見ていない訳では無いが、どちらかと言えば私にとってはお兄さんなのである。

「長坂、夏目とは終わったんだろう？」

「多分」

「未練が有るのか？」

「いえ、夏目さんとは付き合いと言えるほどの付き合いでも無いですから」

夏目さんは私の直属の上司だった。

アメリカの大学を卒業してH I H技研に入社した。

と言うか、この会社に入る事が約束だった。

彼は孤児だと言っていた。

中学の時「全中学力能力試験」とやらで上位5位に入った。

たまたまその時の文科省にH I Hの会長の弟が入閣しており、その人はあしなが育英会の役員でもあった。

彼らは早い内から夏目を施設から引き取り、とある資産家の養子と

した。

その資産家はH I H関連の親類で、年老いた老夫婦が暮らしていた。しかしこの老夫婦は旅行好きで、自宅に居た事が殆ど無かったらしい。

要はH I Hの資金で育った子供なのだと、夏目本人が言っていた。

それでも彼はまだ二十八歳だが、異例の速さで昇進している。（藤堂さんからすれば年下だ。だから呼び捨てなんだろうな）

私が考えている事の更に先を読む、ずば抜けて頭の切れる上司だった。

部下を使う能力も長けており、上司のあしらい方にもそつがない。将来は重役だろうと噂になっており、夏目さんの上司達の娘との縁談が引手数多だと聞いた事がある。

そんな彼にも悪い癖が有った。女癖である。

会社では公然と私と付き合っていると吹聴し、会社の娘には手を出さなかった。

しかし、バーのママ、喫茶店のウェイトレス、取引会社の事務員などなど。

会社を一步出れば別次元の男だった。

女性が放っておかない男性の代表そのもので、その事を夏目自身が一番知っていた。

見た目は純情な美少年、中身は悪魔も驚く毒舌者。年上年下どちらの女性の扱いにも長けており、女性の喜ぶツボを心得ている。

会社では出来る上司で鬼の上司、部下思いの上司だとも言われていたが、綺麗な顔の下は冷たい氷の微笑みが張り付いていた。

それでも、私にとっては面白い人だった。

「年末年始は実家に帰るんだっけ？」

「はい」

「こっちに帰ってきたら連絡をくれないか」

「あの・・・」

「難しく考えなくてくれ。今まで通りに接してくれていいんだ」
「・・・はい」

デザートはカットフルーツと冷たいジェラートの盛り合わせ。

その他に、小さくて丸いバスデーケーキが真ん中に置かれた。

（お兄さんの手作りだと聞いて驚いた。ケーキショップに並べられる程、綺麗にデコレーションされた苺のケーキだった）

ローソクを3本中央に差して（1本が10歳換算）、マッチで火を点ける。

照れる藤堂さんに、何時の間にやら側にやって来たお兄さんが寄り添う。

ためらいがちに吹き消す藤堂さんの顔が少しだけ赤くなった。

ワインもグラスに残り少なくなった頃、奥の部屋（個室があつたらしい）から数人の人がコートを手を笑いながら出て来た。

何処から見ても上品そうで、来ている洋服、手に持っている毛皮のコート、身に着けている貴金属から、どこから見てもお金持ちだと語っていた。

でも、何処かで見た事がある人達だと思って目で追っていたら、一人だけ、こちらを見ている人物が居た。

連れの女性に声を掛けられ、直ぐに出口に向かって行つたが、あれは周だった。

（何故睨むんだ!？）

「どうした？」

「いえ、そろそろ帰ります」

「そうだな。送って行くよ」

「いえいえ、そこまでして頂く訳には行きませんよ」

「もう遅いから、送って行く」

タクシーを呼び、一緒に後部座席に乗り込む。
お兄さんのお見送り付きで。

手には、お土産として頂いて来た苺のバースデーケーキ。

「これは、やっぱり藤堂さんが持って帰った方がいいんじゃないですかね」

「俺に一人でケーキを食えと？」

「そーゆー意味では無いです。遠慮なく頂きます」

私の手を藤堂さんの手が包む。

そのまま私の家へと向かった。

「すみません。そのコンビニで止めて下さい」

「ここでもいいのか？」

「あのアパートなんです。でもこのケーキに合うワインを買って行こうと思って」

藤堂さんはふっと笑うと、私の頬に手を滑らせその手を頭の上に置いて、ポンと一つ撫でてくれた。

自分の部屋のベランダから見える景色は結構好きだったりする。

3階からの眺めは高くも無く低くも無く、裾野に広がる街明かりが所々に見える。

片手に缶ビール、もう片手にメンソールのタバコ。

何だか精神的に追い詰められてる気がする。

コンビニでスパークリングワインを買った。

それと一緒に買ってしまったタバコ。

（やっぱり札幌に帰るのは止めよう）

今のまま帰っても、両親に心配を掛けるだろう。

あの人は意外と人の機微を読み取るのに長けている。

始めから帰ると決めていた訳でも無いし、両親にも言っていない。

チケットも取っていなかったのだから、元々その気が無かったのだらう。

人と一緒に居るのが堪らなく苦痛に思う。
末期だな。

夏目なら笑わせてくれただろうか。

7話 パースデーケーキ（後書き）

前話の続きの為、短めな文章となりました。

個人的な事ですが、クリスマススイブは家族と過ごすのが当たり前と
思っている作者です。恋人とホテルやレストランで二人で過ごす事
に憧れます！（笑）

8話 昔の恋人

25日の夕方、携帯電話が鳴っている。

一向に鳴り止む気配が無い。

ソファーから起き上がり、ベッド脇のチェストの上から携帯を取り上げる。

【着信中：夏目のバカ】

やや暫く凝視したが、画面をタッチする。

「・・・・・・・・」

「夏目のバカって名前はまだ変えて無いのか？」

「そのままだ」

「いい加減変えろ。てか、抹消してくれ」

「分かった。今すぐでいいか」

「悪いが会話が終わってからにしてくれないか」

「会話も無いと思うが」

「ルウくん？ちよつと荒れてる？」

「普通だ」

「そう？それじゃあ、北仙台駅前の白木屋で待ってるね」

「なっ！・・・おい・・・」

こっちの返答も聞かないまま電話は切れてしまった。

「おー、こっちこっち」

笑顔で手を振る夏目は、少し日に焼けて、少しだけ髪が伸びていた。それでも相変わらずスラリとした美少年で、黒いタートルネックが似合っている。

「私が実家に帰ってるとは思えないんですね」

「電話に出た時のお前の声で、こっちに居ると思った」

「声、ですか」

「相変わらず分かり易いから、可愛いんだけどね」

「分かり易いと言うのはあなただけですよ」

「オレの特権だねー。所で何があった？藤堂に迫られたか？」

「あつ、えつ、何で藤堂さんが出てくるんですかね」

「やっぱり迫られたのか。相性は良かったか？」

「相性も何も、まだ付き合ってますんよ」

「へー、俺が居なくなったら直ぐに手を出すと思っていたんだがな。

彼奴は結構慎重派だったのか」

「何の話ですかね」

「お前は気づいて無いだろうが、お前を狙ってた奴は結構居たんだ。おれの先制攻撃で雑魚は諦めたようだが、藤堂だけは読めなかったな」

「そんな事を言われてもなー。藤堂さんはお兄さんみたいなんですよねー」

「ああ、藤堂が可愛そうになってきた」

「五月蠅いな」

「それで？話は何ですかね」

「・・・バレてたか」

「夏目さんが、こーんな賑やかな場所に呼び出すって事は、マズイ事が、イイ事でしょ？それと会社の人には知られたく無い事」

この場所は、H I Hに努めている人間にとっては鬼門だ。

北仙台駅前と言えば、T T K技研の東北支社が目の前にある場所である。

自ずとその周辺には、T T K関連の企業も軒を連ねているし、居酒屋やバーを利用する人もT T Kの人が多い。

わざわざそんな場所の居酒屋チェーン店で待ち合わせが出来るのは、夏目この人だけだろう。

（お蔭で見なくていい物まで見てしまった為、気分が悪い）

「やっぱりお前は永遠の恋人だわ」

「それは脚下致します」

「つれないねー。オレが後にも先にも惚れた女はお前だけだよ。惚れてるから一緒にはなれないんだ。オレは腐った奴だからね」

「・・・・・・」

「基本的に、オレは仕事人間だ。仕事の為なら何でもする。裏だろ
うが女だろうがね。だから家庭を持つ気は無かったし、持ったとしても安心出来る場所が欲しい訳じゃ無い。オレの安心できる場所、
知ってるか？」

「会社、それも給水室」

「流石だねー。お前の良さを分かってくれる奴を探せ。藤堂は無難
だが、無難過ぎるかもしれないな。でも彼奴はいずれ本社勤務にな
る男だ」

今日の夏目は随分饒舌だ。

昔から話し上手ではあるが、今日は何か切羽詰まった事でも抱えて
いるのだろうか。

「九州で良い事あった？」

「何で九州に飛ばされたと思う？」

「会長の出身地でＨＩＨの御膝元。試された？」

「結婚する。ＨＩＨの会長の孫とな」

「そうなんだ。おめでとう。少し寂しいかな」

「馬鹿だね。オレの恋人はお前だけだって言っただろうが」

「幾つ？」

「二十三。去年の本社会議で会って以来、ずーっと追いかけてくる
女だ。オレが何を言っても、何をしても鼻で笑う奴だ。まったく可
愛く無い。でも、あの会長の孫だけの事はあつて頭が良いんだ。有
名大学を出ている訳でも無く、普通のお嬢様学校出で、のほほんと
している癖に頭の回転が速い。オレが考えもしない事を実行に移す

女だ」

「仲が良いんだね」

「そうかも知れないな。アイツと居るのは結構楽しい」

「それなら良かった」

ああ、肩の荷が下りた様な気がする。

夏目が転勤になった時、寂しい気持ちも確かにあったが、ほっとする気持ちが大きかった。

初めは人の気持ちに土足で踏み込んでくるこの男に苛々していたが、気が付けばこの男が私の素直な気持ちの唯一の捌け口となっていた。夏目から見れば私は分かり易い女だったのだろうが、私から見た夏目はとても分かりづらい男だった。

素を出せるが、緊張もする。

あの頃は、自分から会いたい等と一ミリも思わなかった。

一年近く離れた所為だろうか、今は手に取るように夏目の気持ちが良く分かる。

好きだが一緒に居られない相手。

一緒に居るだけでお互いが傷つく。

今の関係が一番しっくりくる。

離れてる方がお互いが良く見え、気持ちを察する事が出来る。他人には理解出来ない関係だろうな。

夏目が私を通り越して、後ろのガラス窓の向こうを見ている。ガラス窓の向こう側にはT T K東北支社の八階建てビルが聳えている。

「お前の部屋に足を踏み入れる奴が憎いな」

「そんな奇特な人が居るかな。夏目さんでさえ踏み入らなかったし」

「お前の居場所を知ってしまうと、抜けられなくなりそうだったかな」

「ああ、そういう事だったんだ」
「そうさ」

「・・・お前、とんでもない奴に好かれたな」

さつきから夏目の視線はガラス窓の向こうから外れない。

「え？ 何が？」

後ろを振り返ろうしたら、夏目に腕を掴まれ慌ただしく店を後にした。

「・・・はあ・・・はあ・・・ちよつと、どうしたんだ・・・」

「・・・はっ・・・はっ・・・ぶっ、あははは！」

手を繋いで走った先は、ビルとビルの狭間の小さな神社だった。

まだ息が上がっている私を思い切り抱きしめる夏目は、肩を震わせ
て笑っている。

「く、苦しいって」

「お前にもう一つ話しておきたい事が有ったが止めた」

「何だよ」

「ルウ、兎に角、逃げろ」

「はあ？」

首筋にチクリと痛みが走った。

「お前は右に走れ。オレは左に走る」

「何で？」

「それと夏目のバカじゃ無く、夏目大先生に変更しておけよ」

意味が分からないと首を傾げて見ると、他の男の前でそんな顔を
するなと釘を刺された。

「よいい、ドン！」

笑いながら走り出す。

数メートル先で立ち止まり振り返ると、向こうも立ち止まって振
返っていた。

ほんの少し立ち止まったまま、スツと手を挙げ大きく左右に振る。
向こう側でも同じ動きが見て取れる。

（何を考えているのやら）

前を向いてコートのポケットに手をつ込み、何処までも真っ直ぐに歩いて行った。

夜の風は冷たく、コートの襟から覗いた首元が寒い。

持って来た筈のマフラーを探す、バッグの中にもコートのポケットにも無かった。

店を出る時には手に握り締めていたのを覚えている。

走る途中で落としたか。

カシミア100%の千鳥柄のマフラーは大のお気に入りだった。

（高かったんだぞー）

そのまま歩いていたら、北仙台駅隣の北四番町駅に辿りついた。
夏目くん、やっぱり、やさしいんだよ。

8話 昔の恋人（後書き）

仙台市の駅名は実際の名称を使用しておりますが、ビルや駅周辺の様子はまったくの架空の物です。その辺をご了承くださいませよう、お願い致します。

夏目っち。自分中心の男だけど仕事も出来て女にモテる。こういう男に惚れると大変辛い毎日を送る事になるのだけど、なかなか抜け出せなくなるのは何故だろうね。こんな男には出来るだけ近づかないのがベストと思ってる。（笑）

追記：次話でやっと0話に到達出来ると思います。長くなってすみません。

9話 突然の口づけ

まだ九時前である。（夜の）

夏目に呼び出されて外へ出たが、25日クリスマス当日の夜は意外と静かだった。

（聖夜か、）

このままもう少し歩くと【Square Rose】が有る。
部屋に帰るのには早いし、これと言って行くあても無いし、で、何となく何時もの扉の前に立って居る。

しかし、黒い扉の脇に薔薇の花は無かった。

（休みだったか）

店の向かい側にある公園のブランコに座る。

バックから先日買ったメンソールのタバコを取り出して火を点ける。
何時も自分が居るだろう店を外から眺めて見る。

吐く息が白い。

視野の端に人影が入り込み、目の前のビルへ息せき切って入って行くのが見えた。

ベージュのコートをはためかせ、襟に巻かれたピンク色のマフラーが落ちそうなのも気にせずに、上へ昇る階段を2段飛ばしで駆け上がって行く。

（凄いな）

ふと、コートのポケットの中で電話が震えているのに気が付いた。

「マヤ？」

「おー、やっと出たな。不真面目人間」

「悪かったな」

「こつちに帰る予定は有るの？」

「無いなー。チケット取れなかったしね」

「取らなかった、の間違いでは無いのかい？」

「五月蠅いなあー。で、要件は？」

「明日そつちに行くから、泊めて遊んでくれる？」

「タカシは・・・ホテルマンだったな」

「そう言う事」

「何時？駅までは来れるつしょ？」

話に夢中になり、目の前に人が立って居る事に気が付くのが遅れた。公園の中は暗いから顔が良く見えない。

「ああ、うん、分かったよ。じゃあ、明日」

通話を切って、携帯で目の前の人の顔を照らす。

（周？）

「熱っ」

右手に挟んだタバコが根元まで灰になっていた。

パンツ と軽く手を払われ、地面に落ちたタバコが燻っている。

それを足で揉み消し、私をじっと見つめている。

（何でこの人は私を睨むのだろうか）

揉み消されたタバコを拾い、携帯灰皿に拾い入れる。

首を傾げて目の前の人物を見上げる。

今まで動かなかったのに、滑らかな動きで腕が伸びたかと思ったら、私の二の腕を掴み持ち上げて立たせる。

ブランコがギーッと耳障りな音を立てた。

「・・・ちよっ」

言葉を投げかける間もなく、また暗闇に包まれる。しかし、其処には温もりと小さな鼓動が聞こえる。

「・・・離、せ」

幾ら力を入れても、その胸を叩いても、背中に回された腕は解けない。

片方の腕が背中から離れ、後頭部を掴んだ、と思った。

「!?!?!?!?!」

思い切り暴れて、何とか腕を振りほどく。

暴れた所為でメガネが何処かに落ちてしまった。

唇を手の甲で拭い取って、言い放つ。

「お前の女と一緒にするな」

脇をすり抜け公園を突っ切って走り出す。

なんで周が居る？

数時間前には自社の前で綺麗な女性と腕を組んで歩いて居たではないか。

数日前は別の女性達と食事をしていたではないか。

その前はこの公園で別の女性と抱き合っていたではないか。

何故私を抱きしめるのだろう。

目の前のビルの中へ逃げ込もうとするが、足の長さで叶う訳も無かった。

道路の真ん中で捕まり、ヘソの辺りに腕を回され抱えられるように目的の(？)ビルの中へと連れて行かれた。

何時もは天国へ続く階段と思っているが、その階段の裏側に回り込む。

そこには【三輪旅行代理店】の看板が置いて在り、簡素なドアがある。

三輪さんの会社の裏口なのだが、今日は生憎と閉まっている。

コンクリートの壁を背に立たされる。

見上げる周の瞳が剣呑な雰囲気纏っている。

「待て！ 周、早ま・・・っう・・・」

顎の裏を掴まれ壁に押し付けられる。必然、上を向く形となった。

「俺は、犬じゃない」

待てが嫌なら、伏せと言って見るか。

「・・・私は、猫派、だ・・・」

実家では猫を飼っていた。

「俺は、犬も猫も嫌いだ」

お前には虎がお似合いだ。 嫌、メス豹か。

「・・・女が、一番か・・・」

只でさえ大きな目を、更に見開かれると食われそうだ。

「俺にも、選ぶ権利は有るが」

それなら此処に居る必要は無いだろう。

「・・・なら、他の女を探せ・・・」

顎を押さえていた手がピクリと動いた。

「秋弦しじゅう」

何で？何で私の名前を知っている？

「！ おい！？ 何でその・・・んっ・・・」

重ねられた唇が熱い。

「逃がさない」

訳の分からない口づけに目を見開いたまま凝視する。

周の目も見開いたままだった。

何時の間に目を瞑っていたのだろう。

大きな目を囲う長い睫、意思の強そうな濃い茶色の瞳、綺麗に整えられた形の良い眉毛。

何時までも眺めていたい顔だった。

しかし、周の暖かい舌が歯列をなぞり、文句を言おうと開きかけた

少しの隙間から潜り込んだ塊に絡め捕られた時、ぎゅっと目を瞑り、それと同時に意識がプツリと途絶えた。

「……っはぁ」

随分と長い時間拘束されていた。

何時までも離れないのでは無いかと思う程に強く抱きしめられていた腕が、予告も無くふわりと緩んだ。

がしかし、離れない。離れて行かない。

ふっ　と頭上から漏れる息。

周のコートにしがみ付いていた私の手をゆっくりと解いてくれる。

私の手は、目の前にあったベージュ色のコートを力一杯握り絞める事しか出来無かった。

そして握り絞めていた指先は白く、僅かに震えていた。

「冷たいな」

私の両手を包む大きな手は、私の手より少しだけ暖かった。

周は自分の首元に巻かれたピンク色のマフラーを外し、寒そうにしている私の首元に掛けようとしてくれた。

その手が一瞬止まり、綺麗な顔が悪魔の様に歪んだ。

「アイツ……」

私の襟元を力任せに広げられ、ブチブチッと言う音と共にコートのボタンと中に来ていたシャツのボタンが同時に数個弾け飛んだ。

「な、何を！」

開いた胸元を手でなぞり苦い顔で眺めた後、首筋に顔を埋めて痛い位に唇を押し付けて来た。

「あっ……いつ……」

「上書きだ」

壁に凭れたまま周をぼーっと見ていた。

「・・・ああ、そうだ、迎えに来てくれ。・・・いや、そっちに任せる・・・そう・・・」

周は携帯で何を話しているのだろう。

私は此处で、何をして居るのだろう。

今日は、

今日は、

そうだ、

夏目から呼び出されて、日の出駅前で、何故か走って、神社で手を振って・・・

『逃げろ』

夏目の声がした。

9話 突然の口づけ（後書き）

遅くなりましたー。やっと冒頭まで辿り着く事が出来ました。
周は無事に秋弦を手にする事が出来るのでしょうか？
夏目ってマジで嫌な奴かも・・・（笑）

10話 周と陣

「周様、マンションで宜しいですか」

「・・・嫌、会社へ行ってくれ」

「畏まりました」

迎えの電話に少し手間取り、振り返った先に秋弦の姿は無かった。

彼女の居た場所に俺のマフラーと彼女の鞆が落ちていた。

それを拾い上げ、追いかけようと思ったが、きっとアイツはまた逃げるだろう。

掴んだと思った手がスルリと逃げて行く。

迎えの車を待つ間、公園に足向け彼女の落としたメガネを拾い上げる。

（アイツは落し物が多い）

彼女の唇はタバコの味がした。

初めてだな、タバコの味がする女は。

俺の周りの女は甘い香りのする女ばかりだ。

だから、スパイスが欲しかったのかもしれない。

しかし、スパイスの刺激を覚えてしまうとそれ無しでは居られなくなる。

『捕まえるのは難しい相手だぞ』

もう会社は冬季の長期休暇に入っている。

それでもわざわざ会社に来たのは、面倒な事に関わりたく無かったからだった。

正確に言っていると昨日から会社の近くのホテルで眠り、日中は会社に来ていた。

鳴りやむ暇も無い携帯電話は机の引き出しの中。

会社の電話はとくに留守電に切り替わっている。

極近しい人間しか知らないもう一つの携帯電話はポケットに入っている。

（家族にすら教えていない）

その携帯の画面を開き、彼女の携帯に電話を掛けて見る。

（出る訳が無いか）

昨夜はホテルの部屋で酒を飲んだ。

相手は必要では無く、ホテルの窓から見える景色が丁度良い相手だった。

頭の中は前日に見た彼女とその連れの事で占めていた。

恋人同士と言う雰囲気では無かった。

相も変わらず、メガネに一つに纏めた髪、薄らと化粧はしていたが色味が少ない。

せつかくの大きな目に長い睫が綺麗なカーブを上に向かって伸ばしているのに、メガネに遮られて一回り小さく見える。形の良い眉もメガネのフレームが被さって殆ど見えない。鼻はあまり高くないが、細く真っ直ぐと伸びており、その下の唇は口紅を付けなくてもほんのりと赤みがある。

化粧をすればもっと綺麗になるだろうと思うのだが、本人にその気が無いと宝の持ち腐れと同じである。

来ている服もグレーのシンプルなパンツスーツだった。地味すぎる。相手の男は、ツイードのジャケットを着込み、後ろ姿しか見えなかったが短髪の頭を綺麗に整えていた。

2人の間には小さなケーキが有り、ロウソクが数本立って居た。彼女の誕生日は今日では無い。それじゃあ、相手の男か。

今まで思った事は無かった。

自分の誕生日を誰かと祝うと言う事を。

小さい頃は両親や兄弟が食卓を囲み、自分の誕生日を祝ってくれる事が嬉しかった。

父も母も常に不在で、兄達も学校や部活、塾などと忙しく、家族全員が揃う事は年に数回程だった。

自分自身も年齢が重なるに連れ、周りには家族以外の人間が居る事が多くなり、イベント事は特に家族以外の人間と過ごす事が増えて行った。

それはアメリカに留学しても同じで、男女関わらず自分の周りには人が溢れていた。

それはそれで楽しかったのだが、二十歳を過ぎた頃から、イベント当日は誰も知らない場所で一人で過ごす事が増えて行った。

友人達は皆不思議がっていたが、何度もそんな事が続く頃には暗黙の了解となっていた。

只一人、俺の居場所を見つけ、一言二言の言葉を放って姿を消す奴が居た。

それが 夏目陣（なつめじん） アイツであった。

ハーバード時代に一番遊び歩いた相手でもある。

陣は他の人間とは別の生物だった。

あれ程屈折した人間は見た事が無い。

しかし、それがアイツの良さでもある。

大学の卒業後、俺は日本へは帰らずアメリカの支社で経営の実践を

学ぶことにした。

今までの住まいを片づけ、そろそろ出発だと言つ時にアイツがふらりと現れた。

「オレ、H I Hに行くよ」

「決めたのか」

「T T Kは敷居が高くてね」

「恩義か」

「それもあるけど、周と肩を並べる場所まで行つて見たくてね」

「・・・そうか、待つてる」

そんな会話だったと思う。

それ以来、連絡も取っていないし（お互い知らないと思う）会った事も無かった。

その夏目陣が、俺の目の前にいた。

それも、秋弦と一緒に。

昨夜は朝方に眠り、起きたのは午後をとくに過ぎていた。

別に急ぐ訳でも無いし、のんびりと身支度を整えて会社へと向かう。歩いて10分程の道程を歩いて居ると、何処で待っていたのか金融機関のご令嬢殿が歩み寄つて来た。

挨拶程度の笑みを浮かべ、食事の誘いを丁寧にお断りして、止めたタクシーにご乗車頂く。

絡められた腕を解き、閉じたドアに笑顔を張り付けて遣り過ぐす。

その時、視界の隅にこつちを見ている一人の女に気が付いた。

直ぐに踵を返して何処かへ消えて行った女は、破れてぼろぼろのジーンズにブーツ、黒いコートを羽織り首元には千鳥のマフラーを巻いた秋弦だった。

咄嗟に向かい側の車線に渡り、その周辺を捜したがそれらしい人は

見つけられなかった。

別に俺に会いに来た訳ではあるまい。

警備員に挨拶をし自分の部屋へと歩いて行く。

部屋には秘書が一人、机に向かって雑誌を見ていた。

必要な会話を交わし、それ以外はお互い好きな事をした。

珈琲を飲もうと、静かなラウンジへ向かい、ボタン一つで自動で作られる珈琲を片手に窓の外を見ていた。

何時もは気にならない向かい側のビルの窓際。

クリスマスのこの日も、居酒屋のチェーン店は人で溢れている。

その人混みの中から感じる強い視線、見覚えのある顔。

（あれは・・・陣か？）

その向かい側、窓に背を向けて座っている女性の背凭れには、千鳥模様の何かが掛けられている。

（千鳥・・・！）

部屋へ戻りコートとマフラーと一緒に掴み取り、走りながらそれを着込む。

向かいのビルの居酒屋に駆け込むが、目的の人物は帰った後だった。

（絶対にアイツは居る）

ビルの脇を通り抜け、裏道に入った先、ガードレールに腰を掛け手を挙げている奴が居た。

「よお、お誕生日おめでとう」

「相変わらずだな」

「でも探し人はオレじゃ無いんだよねー」

「ああ、違うな」

「傑作。どこぞのご令嬢への冷たい笑い。必死で探しまわる姿。最後の姿は今まで見た事が無いよね」

「何故一緒に居た」

「ルーか？元オレの彼女」

「知っている。お前は婚約者が居るだろう」

「それかも知ってるんだ。流石だねー」

「わざわざ、あの場所を選んだのも予定通りか」

「嫌、偶然。会社の連中に会いたくなかったから、絶対合わない場所を選んだだけ」

「偶然？信じると思うか」

「別に信じてても信じ無くてもいいさ。面白い物が見れたからね」

「お前は・・・」

「周、捕まえるのは難しい相手だぞ」

「・・・・・・」

「オレが諦めた相手だ。相当な変わり者だ」

「・・・諦めた、だと？」

「結局は彼女の何も手に入れられなかったよ」

「難攻不落、か」

「あつちはどう思ってるか分からないけどね」

「陣の本気の相手だったとはな」

「俺も結構凹んださ」

「だからか？そのマフラー」

陣が首に巻いているのは千鳥柄のマフラーだ。

「内緒にしてね？」

東京へ帰る新幹線に乗り遅れると言って、走って駅へ向かって行った。

今度アイツに会うのは何時だろう。

そんな事を思いながら、奴とは反対側の道を走って行った。

10話 周と陣（後書き）

女子目線の会話より、男子目線の会話の方が楽しいのは何故かしら？（笑）

11話 週の回想録

【Square Rose】

そこはたまたま立ち寄った店だった。

その近くに割烹料理の店が有り、知人との会合に利用した帰り道に入った店だった。

知人からは国分町の馴染の店に行こうと誘われたが、あの時は別の約束があつて断つたのを覚えている。

確か、次の約束まで時間が少しあり、迎えの車が来るのにもまだ時間があつた様に思う。

テレビのニュースでは、桜の開花宣言があちらこちらで騒がれ始めた頃だったので、街灯の下で白っぽく揺れている花に目が行った。

その二月前、数年ぶりで帰国した日本はまだ肌寒く、初めての東北での生活に少々戸惑う事も間々あった。

JRの乗り方、エスカレーターの乗り方、ゴミの分別、気を抜くと土足のまま部屋を歩いている事も多々あった。

やっと日本人としてのマナーや生活習慣にも慣れ、自分にも余裕が生まれ始めた頃だった。

だから何となく、桜の花を見て見ようと、その辺りを散歩気分でのんびりと歩いてみた。

目印にしていた街灯の花は意外に遠く、それでも歩く先々の家の庭に咲いている桜の花も見頃だったから、大して苦にもならなかった。桜以外にも白くて大きな花が咲き綻ぶ枝もあり、見ていて飽きる事

は無かった。

そんなゆつくりの散歩だったが、それでもそろそろ目印の花に近づく頃、その場所に先客が居る事が見て取れた。

街灯の下、照らし出される姿は桜の花を見上げる女性の横顔。

上下黒のパンツスーツ、襟元には白いシャツ、肩には黒いトートバッグ、バッグの持ち手を握る手首にはシルバーの時計、胸も尻もそこそこの膨らみがあり、身長もやや高め、

肩より少し長い髪の毛は所々が別方向に向いている。

顔は街灯が陰になり、良く見えない。

しかし、その佇まいが綺麗だった。

彼女は花に向かってにこりと笑うと、手に持っていたメガネを掛けて、少し先にあるビルの中へと消えて行った。

俺は柄にもなく彼女と同じことをしてみた。

街灯の下に立ち、街灯と並ぶように聳え立つ桜の木を仰ぎ見る。

風がそよぎ薄紅色の花びらを揺らす。

やわらかく香る花の香りの他に、さっきまで佇んでいた女性の香りが残っていたような気がした。

彼女が入って行ったビルを見上げると、五階建ての小さなビルで各階には一軒ずつ看板が掲げられている。

一階だけは旅行会社だが、それ以外は全て飲食店の看板だった。何の気なしに階段を上がって行く。

二階のフロア左手に黒くて大きなドアが一つある。看板が無い。そのまま三階へ上がろうと途中まで上り、さっきの黒いドアを見下ろす。

ドアの脇に真っ赤な薔薇の花が一輪、コップに無造作に飾られている。

る。

その薔薇の花から目が離せず、そのまま階段を下って黒いドアを開いていた。

俺は俺であって俺でない存在として居られるこのスペースが気に入っている。

なによりこの店では普通の人間でいられるのが嬉しい。

街灯下の女性もこの常連のようだった。

皆から「ルウくん」と呼ばれている。

見た目は少し控えめなグラマラスなんだが、纏っている雰囲気や言葉遣いが男の子っぽい所為だろう。

掛けているメガネも黒縁のセルのメガネで凛々しく見える。

それでも言葉の端やちよつとした仕草は女っぽく、偶にドキリとする事がある。

常連の男性達には良く口説かれているが、笑ってかわしている。

この店に通い出して半年も経つ頃には、常連それぞれの事情や抱えている問題も少なからず聞こえてくるようになった。

一番聞きたくて一番聞きたくない彼女の話も耳に入る。

勤め先がH I H技研と聞いたのは結構早い時期だったが、俺の事は知らない様だった。

恋人が居ると知ったのはそれから暫く経ってからだったが、相手の名前を知った時の方がかなり驚いた。

陣が仙台支社に居るのは聞いていたが、まさか彼女の直属の上司で恋人だとは余りにも皮肉だと思っていた。

それから少しだけ彼女との距離を遠くにするようになっていた。何となく。

今年の春の移動で、陣が九州へ移動になったのは知っている。

ＨＩＨがアイツを会社の中樞へ置こうとするのは前から分かっていた事だった。

それでも今までのスタンスを崩すつもりは無かった。

北海道の地で偶然に会い、雨に濡れたブラウスが体に張り付いて、その中の黒い下着を見るまでは。

ズルいやり方だったかもしれない。

彼女の友人と飲みに行ったり、彼女を無理やり泊めたり、そして彼女の寝顔をだまって見ていた事。

いつものバーで店の手伝いを頼まれた時は少し困った。

その日は接待の予定が入っていたのだが、別の役員に変わって貰った。

お蔭で大層楽しい物が見れた。

彼女の料理ベタはどうやら本当のようだった。

しかし接待を他の役員に押し付けた為、一緒に同行して貰った秘書の女性に散々文句を言われた。

まさか、店までやって来るとは思って居なかった。

彼女の住まいはこの近くで、時々この辺りで見かける俺を不思議に思っ居たらしい。

接待の後の帰り道、たまたまゴミ出しをしに降りて来た俺に気が付いて、後を付けてあの店に入って来たらしい。

それから暫くの間は仕事が忙しく、店に顔を出す事が出来なかった。十二月も半ばを過ぎた頃、漸く時間を空けてバーへと向かった。

其処には彼女の姿は無く、ママが預かりものが有るわよと言われ、受け取ったのは先日貸したシャツだった。

「残念、３０分位前に帰ったのよ」

袋の中にはシャツと一緒に、某有名チョコレート店の小さな包みが入っていた。

「あの子、いちごちゃんの事を気にしていたわよ」

「いちごはもう大丈夫だろう」

「雅弘君だっけ？尻に敷かれそうだよ」

「その方が良いと思うよ」

「そうだね。ふふふ」

いちごは上の階で彼氏（雅弘）と喧嘩をし、逃げる様にこの店に入
って来た娘だった。

俺の隣に座り、マスターや他の客を巻き込んで彼氏の悪口を散々言
っていた。

他の人達は迷惑そうな顔をしながらも、うんうんと話を聞いていた
が、止む事の無い悪口に流石の俺も嫌気が差し、一言文句を言った
のだが、それがいちごに慕われる切っ掛けとなった。

いちごは以外にも素直で、直ぐに店の人たちに謝った。

「五月蠅くしてごめんなさい」

それから、仲直りをしたかと思えば、喧嘩を繰り返す日々だった。
雅弘も22歳とまだ若く、見栄を張りたい頃なのだろう。

しかし彼も来春には社会人になる。

就職活動で上手く行ったり行かなかったりを繰り返し、少しずつ世
の中が見える様になって来たようだ。

自分に合う会社を選び、そこに受け入れられる事になった時には、
多少立派な青年の顔をするようになっていた。

今では彼女を大切にし、喧嘩をすることも減ったらしい。

彼女は先月、「いままでありがとう」の言葉を残してこの店を後に
している。

彼女も少しは大人になろうとして居るのかも知れない。

いちごは突然天から降って来た（二階か）妹だった。

本当に妹が居たら、もっと心配し、もっと過保護にしていたのかも
知れないが。

俺も、いちこの様に足掻いてみようか。
只見ているのには、もう飽きた。

しかし、逃げた相手を捕まえるのは、想像以上に困難となった。

11話 周の回想録（後書き）

この辺りで周の回想も打ち止めです。次回からまたぼちぼちと本題へと戻ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0197y/>

プラネタリウムの天気予報

2011年11月30日15時54分発行